

ICT機器(ビデオ会議)を活用した特別活動の取り組み ～ 海外交流を通して ～

永嶋 昌博

前 東京都北区立桐ヶ丘中学校

キーワード：特別活動、ビデオ会議、ICT活用、海外交流、異文化理解

1. はじめに

高度情報化社会の進展にともなうグローバル化がこれまでにないスピードで進行している。そして、国際化、地域との連携協力など、世の中の状況変化に応じて、学校における「特別活動」の意義も、これまで以上に大きくなってきている。

例えば、現行の中学校学習指導要領(5章「特別活動」第1「目標」)には「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う。」と記載されている。¹⁾

また、文科省の教育課程部会特別活動ワーキンググループの特別活動のイメージ(たたき台、平成27年12月22日)には、

【中学校】多様な他者と協働し、集団活動を行うことを通して・・・

- ◇ 自己や他者の個性を理解し、自他が安心して生活できるよう積極的にコミュニケーションを図るなど、進んでよりよい人間関係を築くことができる。
- 学校や地域の課題について把握し、合意形成を図ってよりよい解決策を決め、実行することができる。
- 自己のよさや個性、置かれている環境を理解し、それを生かしつつ日常生活を改善することができる。
- 情報の収集・整理と、興味・関心、自己の適性の把握などにより、将来を見通して自己の生き方を選択することができる。

との記載がある。²⁾

2. 国際理解教育・異文化理解教育等の推進 ～ビデオ会議の活用～

筆者は、東京都北区立桐ヶ丘中学校を中心とした特別活動として、国際理解教育・異文化理解教育を題材にするとともに、整備を続けていたICT(Information and Communication Technology、情報コミュニケーション技術)の活用も視野にいれて、海外の子どもたちとの交流を通じた「学級・学校内における友達との関係づくり」を(改めて見直す機会を)デザインした。

ICT等の情報コミュニケーション機器を有効に活用して、海外の人々と交流することで、他国の文化を理解するだけでなく、自国の文化についても、改めて深い理解と文化への畏敬の念を子どもたちに醸成することは、極めて重要なことである。

また、交流活動を通して、子どもたちに自己アイデンティティを持たせ、自己有用感を高める上でも貴重な機会となることを意図した。

本稿では、整備を続けてきたパソコンやタブレット端末を用いて、これまでに実施したインターネット経由のビデオ会議を活用した交流事例について紹介する。

2.1 食文化について知る －「世界の学校給食」(中学校)

海外の学校給食の様子を知り、日本の学校給食との違いを知ることで、国によって、様々な食文化があることを子どもたちに理解させる活動を行った。

日本の給食が、世界でもたぐいまれな素晴らしいものであることを認識させることができた。また、食育という観点からも、自国の給食について改めて考えさせる良い機会となった。

2.2 行事について知る －ハロウィンについて(小学校)

近年、我が国においても「ハロウィン」は、一般的になってきている。しかし、海外では、どのような形で、ハロウィンを祝っているのか、その様子を知ること



図1 記念発表会での交流の様子

改めて「ハロウィン」について知る機会となった。

偶然、ビデオ会議で、著名なハリウッドスターであるウィル・スミス氏の経営する小学校と交流することができた。その折、その小学校に在籍していた娘さんのウィローさんと交流した。このことが縁になり、ウィルス・スミス氏が新作映画の発表会に訪日した際、ビデオ会議で交流した生徒が記念発表会に招待された。代表生徒がウィル・スミス氏と息子ジェイデン氏に英語で質問をする機会があった。代表生徒は「自分の英語が通じた！」という感動をいなくとともに、一生涯忘れ得ぬ素晴らしい体験を持つ機会を得ることができた(図1)。

ビデオ会議がきっかけとなり人間関係が広がり、ついには、有名なハリウッドスターであるウィル・スミス氏と息子ジェイデン氏と対面できたという喜びを感じ取ったと考えられる。

2.3 自国の伝統的な遊び文化と世界の様々な遊び文化を知る(中学校)

交流のトピックとして、子どもたちに身近な「遊び」を取り上げた。ここでは、日本の伝統的な遊び文化の中から、海外の子どもたちに紹介したいものを選ばせた。この活動を通して、日本の伝統文化に対して興味関心を引き出し、改めて、自国の伝統的な遊び文化について理解を深めることができた。

具体的な交流活動では「剣玉遊び」を取り上げて、海外の生徒を対象に紹介する活動を行った。剣玉は、海外でもブームになっており、実際のビデオ会議で、お互いに剣玉のパフォーマンスを見せ合うことで、和やかな交流を深めることができた。

子どもたちは、国が違って遊ぶ喜びは同じだということを感じ取ったと考えられる。

3. 考察

ビデオ会議を活用した海外交流を通して、子どもたちは、その国ごとに様々な文化があることを知る機会を得ることができた。同時に、知識を得るだけでなく、ビデオ会議により、お互いの顔を見ながら子どもたち同士の心温まる交流を実現することができ、相互に理解し合い、国や人種を越えて、平和的な世界を作ることの大切さも学ぶ機会を得ることもできたと考えられる。

また、国や文化が違って、多くの共通するものがあることをも理解することで、国を超えての思いやりの心や相手を認めることのできるやさしい心を子どもたちに育てることができると考えられる。

こうした活動を通して、子どもたちにグローバルな視点に基づき、様々な物事を思考し、より豊かなコミュニケーション能力を育てることができると思われる。

4. おわりに

筆者は、これまでに、中学生の海外派遣の引率に携わった経験もあり、国際交流プロジェクト(ROW)に参加し、積極的に活動してきていることから、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、ドイツ、ベルギー、イスラエル、ポーランド、香港などの学校との交流実績(図2、図3)があり、交流相手校を探すのは容易であった。

しかし、一般的には、海外の交流先の学校を探すことが、最も難しいと考えられる。交流活動を行うための機器の整備は費用の捻出ができれば可能であるが、交流活動を実現するための海外の相手校を探すことは、極めて大変であるという現実がある。

この点についての知見の蓄積や人的資源の有効活用



図2 カリフォルニアの学校とのビデオ会議の様子



図3 交流先のノースキャロライナの小学校

が望まれる。

以上のことから、特別活動(特に、海外交流活動)をさらに充実したものとするためには、

まず、情報環境(ICT機器やインターネット、ビデオ会議システム等)を整備すること。その後、それらの環境をより良く活用するための研修を行うこと。

そして、何よりも大切なことは、指導する側の教員が、海外の先生達とコミュニケーションを深めることである。教員相互の信頼関係が確立できれば、ビデオ会議の実施にかかわる様々な調整を柔軟に行うことが可能となる。

海外交流に限らず、ビデオ会議等を効果的に進めていくことができるか否かは、教員相互間の人間関係をより良いものにしていく努力が必要であろう。

参考文献

- 1) 文科省「中学校学習指導要領」平成20年3月
(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/toku.htm)2016年2月15日アクセス.
- 2) 文科省 教育課程部会 特別活動ワーキンググループ
(第2回)配布資料 資料3(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/066/siryo/1365800.htm)2016年2月15日アクセス.